絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践
～うどん対ラーメン～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
宮脇蒼・中村楓果・橋本和花・今村美奈
明心優・津山桜・上村星紫
田中莉央・徳永琉亜・時枝悠斗・内田千楓
矢野奏海・井形勇人

1. 実践の概要

題材とした絵本：『うどん対ラーメン』
作 田中六大　　出版 講談社

実践のタイトル：「うどん対ラーメン」

実践準備の担当：　総合責任者（宮脇）
脚本（中村）
大道具（井形、時枝、内田、津山、田中）
衣装（橋本、今村）、音楽（矢野、上村）、記録（明）

実践時の担当：　うどん（宮脇）、ラーメン（明）、そば・ピアノ（中村）、宅急便（井形）、裏方ナルト、えび天、 チャーシュー（時枝、内田）、裏方かまぼこ、煮たまご（徳永、橋本、今村）、プロジェクター（矢野、上村）、ラーメンモンスター（津山）、うどんやのお姉さん（田中）

2. 題材について

「うどん対ラーメン」の絵本は、「多様性の尊重」と「協力の大切さ」のテーマを特徴にしている。うどんとラーメンという日本で馴染み深い食べ物を擬人化することで、子どもたちに親しみやすい物語になっていると思い、この絵本を題材に選んだ。うどんは優しい性格でモチモチ感を象徴し、ラーメンは元気で大胆な性格をもっている。このような対照的なキャラクターを作ることで、子どもたちはどちらかに感情移入しやすくなるのではないかと思った。

うどんとラーメンがケンカするという非現実的な設定はユーモラスであり、子どもたちに笑いを提供できると考えた。また物語の中では簡単な言葉でストーリーが進むため、小さな子どもでも理解しやすい劇になるのではないかと思った。

この絵本を選択した理由は、うどんとラーメンという日常的なテーマは、食べ物を通じて子どもたちが身近に感じやすい題材だと感じたからだ。擬人化したキャラクターも親しみやすく、劇に取り入れると演じやすいと思った。うどんとラーメンのケンカから始まり最後には協力するという流れは物語がわかりやすく、劇の中でも子どもたちが表現しやすい内容で、対立と解決の過程がしっかりしているため、子どもたちにも伝わりやすく、分かりやす

いメッセージ性になると思った。また、劇の中でうどん派とラーメン派に分かれ応援することで、劇場にいる全員が参加できる内容にもなっている。うどんやラーメンの具材の登場シーンでは投げる・持っていくという役割を広げることも出来た。最後に争いではなくそば役が中立となり、一緒にご飯を食べに行くというシーンを作り劇の結末としてポジティブな印象を与え劇を終えることができた。このような特徴と理由から「うどん対ラーメン」の絵本を選んだ。

（執筆者：徳永 琉亜）

3.絵本の世界から遊びへの展開

「うどん対ラーメン」の絵本の中ではたくさんの戦う場面がある。初めに、絵本の表紙の裏にあった準備運動を取り入れた。準備運動だが一般的な準備運動をするよりも、うどんの特徴を取り入れた準備運動がいいのではないかとグループ内で話し合い、うどんを混ぜる動きやこねる動き、伸ばす動きなどのうどんを作る動きを取り入れた。子どもたちにはその場に立ってもらうように声かけを行い、戦う前の準備運動をピアノの音楽に合わせてリズムをとりながら自由に身体で表現を行い、子どもたちと一緒にうどんをつくるという体操にした。

戦いの場として、子どもたちが馴染みのある井原堤水辺公園を舞台とし、劇中には大谷公園と表現した。戦いの場面では絵本にあるシーンを元に考えた。初めにうどんとラーメンはうどんの中に入っているかまぼこ、えび天を武器に、ラーメンは煮卵、チャーシュー、ナルトなどそれぞれの具材を使って戦った。どのような武器にするか話し合った際、子どもたちが分かりやすい具材の方が良いという意見が出た為、うどんとラーメンに入っている具材を思い出しながら具材を決め、武器として戦った。戦いの中盤では、麺が絡まる様子をどのように遊びとして表そうかと考えた時、「麺の絡まる様子を蜘蛛の巣テープであらわしたらどうか」という意見がでた。そこで蜘蛛の巣テープでうどんとラーメンが身動き取れない状態を表現した。戦いの終盤では、うどんお姉さんとラーメンモンスターが出てくるが、絵本の中ではラーメンとうどんより遥かに大きかった。さらに、戦いの場面が多く普通に戦うと見ている側が飽きてくる可能性があるとなり、うどんお姉さんとラーメンモンスターを大きくあらわしたいと話し合いを行った。その場面を入り込んで見て貰えるように迫力が出る影絵を使ってあらわした。

うどんお姉さんとラーメンモンスターが登場する場面では、大太鼓の音を取り入れて戦いがクライマックスになることをあらわした。影絵を楽しんでもらうために小さくなったり、大きくなったりして戦った。戦いの最後は徐々にうどんお姉さんがラーメンモンスターより大きくなっていき影絵の楽しさをあらわした。

（執筆者：今村美奈）

4.実践に際して大切にしたこと

今回、うどん対ラーメンを幼教こども劇場で実践する上で、子どもたちがどのような形で参加すると良いのかを考えた時に、まずはどっちが好きなのかを聞いてそれぞれ応援してもらうという意見が出た。しかし、プレ幼教こども劇場の際にうどんとラーメンどっちも好きで選べない子どももいたため、どっちも応援できるように、どっちが好きなのかを尋ねることは止め、それぞれ戦う前に「応援してくれるかな？」と聞きみんなでうどんとラーメンそれぞれを応援できるように工夫した。子どもたちは、それぞれ技を出し合っている時にも「うどん頑張れ～！負けるなー」「ラーメン勝って～」など応援していてとても物語に入りこんで楽しみながら応援している様子が見られて、とても良かったのではないかと感じた。

うどん体操をする場面が絵本の表紙にあり、取り入れることになった。どのタイミングでうどん体操を入れるのかをとても考えた。絵本では最初の表紙部分に載っていたため、私たちも最初に取り入れようと思ったが、いきなりうどん体操をしよう！と言って始めると子どもたちも「なぜいきなりうどん体操するのだろう？」と疑問に思うからいきなり始めるのは違うという意見が上がった。子どもたちがなぜうどん体操をする意味があるのかを分かりやすくする為に大きく構成を変えて、まずはうどんが出てきてラーメンからの手紙を読み戦いに負けないようにパワーをつけるためにうどん体操をするようにした。そのようにすることにより子どもたちにとっても分かりやすく、参加しやすかったのではないかと思った。また、声だけでは動かすタイミングなどが分かりづらいと判断し、ピアノの音源をつけて動きに合わせた音源をピアノで弾きながら体を動かすという工夫を行った。いきなり、体操を始めると子どもたちもついていけないと考え、まずはひとつずつ動きを分けて伝え、最後にぜんぶ通すという形にした。子どもたちも楽しみながら動いている様子が見られたため良かったと思う。

(執筆者：田中莉央)

5.実践内容について

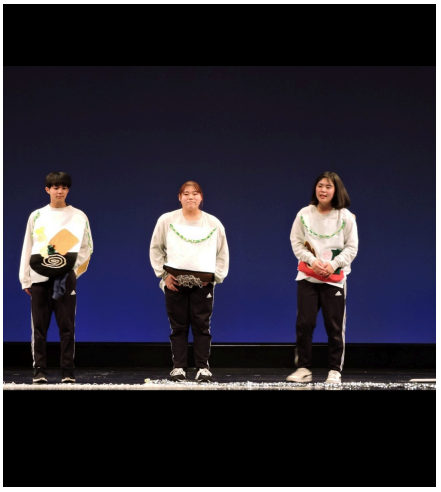
（1）　全体の構成

ピアノの音に合わせてうどんがカーテン裏からスキップをしながら出てくる。舞台の真ん中に立ち「僕の名前はうどん！今日もいっぱいうどんを売るぞ！さぁ仕込みを頑張ろう。」と自己紹介をする。うどんの台詞が言い終わるのと同時に配達員が裏から出てきて、うどんに手紙を渡し、配達員は裏へ戻る。そして、うどんは誰からの手紙か疑問に感じている様子を観客に伝え、手紙を開く。手紙の内容はラーメンが読む。手紙を読み終えたうどんはラーメンに対し、「なんだとー、ラーメンのやつめ。待ってろよ。」と、怒った表情をつくりながら低い声で台詞を言い、その場で足踏みをする。移動している間に黒幕が上がり、その際ピアノの低音部分を使い「子犬のマーチ」を弾く。その後、プロジェクターを入れて、公園の絵を出す。戦いの舞台にうどんが着き、周囲を見渡していると、ナルト手裏剣を裏方の人が持ってくる。その様子が手裏剣を投げられているように見える。

ラーメン（役）がカーテン裏から出てきて、戦いの始まりについての発言を言う。う「なんだと！よーし、今から力がみなぎるうどん体操をしよう！！一緒にうどん体操をやってくれるお友達はいるかな？」と 、子ども達へ問いかける。返事してくれた子どもたちにお礼

を伝える。ラーメンは体が勝手に動いているように表現し、うどん体操の準備をする。うどんの動きは7種類で、オリジナル曲を合わせる。うどん体操が終わり戦いのポジションに移動する。パンチ、キックなどは、実際に手を出すのでなく、言葉や音、動きで表現し実際には身体に当てない。それらを、何回か繰り返す。互いに負けず、手段として蜘蛛の巣テープでラーメンとうどんが身動きが取れないことを表す。その攻撃でも効かず、最終攻撃へと移る。

うどん屋のお姉さんとラーメンモンスターが陰で登場する。影が大きくなったり、小さくなったり、食べられるなどの様子を楽しむ。これらの攻撃についても、実際に身体には当てないで、言葉や音で表現する。食べられてしまったラーメンモンスターに落ち込む。しかし、ラーメンとうどんは負けずに戦い続ける。（パンチ、キック、蜘蛛の巣テープ）すると、激しい喧嘩を見た蕎麦（役）が喧嘩の仲裁に入り、うどんとラーメンそれぞれの良さがあるということを伝える。そして互いの良さを認め合うことが出来た。うどんとラーメンが分かち合う。その後、うどんラーメン蕎麦で、ミートソースを食べることを伝え、お腹を膨らませ、満腹の様子を表す。最後に今日応援してくれたことのお礼を伝え、幕を降ろす。



（執筆者：津山桜）

（2） 子どもたちとの対話について

子どもたちとの対話では、相手の年齢や理解力に応じた言葉選びと態度。子どもを意識した。心して話せる雰囲気を作るために、笑顔や優しい声のトーンを心がけた。また、複雑な言葉や抽象的な表現は避け、簡単で具体的な言い回しを使った。たとえば、「どう思う？」とオープンな質問を投げかけることで、子ども自身の考えや感情を引き出すことを意識したやり取りがあった。さらに、相手の意見や発言を否定せず、しっかり耳を傾ける姿勢が大切だと思った。「なるほど」「教えてくれてありがとう」といった肯定的な応答を使うと、子どもは「聞いてもらえている」と感じると思う。また、対話を通じて好奇心を刺激するため、興味を持った話題を深掘りし、一緒に考える時間を設けていた。

こうした対話は、信頼関係を築き、子どもの自己表現力や社会性を育む大切な機会となったと思った今回の劇では、子どもたちとの対話を意識し、「参加型のやりとり」を取り入れることを重視した。物語が進む中で、ラーメンとうどんが対決する場面では、子どもたちに「ラーメンとうどん、どっちが勝つと思う？」と問いかけたり、「応援してくれる人は声を出してみて！」と呼びかける場面を用意した。これにより、観客として見るだけではなく、物語の一部として自分たちも参加しているという感覚を持ってもらうことを意図した。

こうした対話を取り入れた理由は、子どもたちが物語の展開に積極的に関わることで、より深く楽しみ、印象に残る体験をしてほしいと考えたからだ。特に、幼い子どもたちは言葉を交わすことで感情を共有しやすく、さらにその場の雰囲気を盛り上げる効果もあると感じた。実際に、本番中では「ラーメンがんばれ！」や「煮卵爆弾すごい！」など子どもたちが自然と声を上げる場面が多く見られた。また、「天ぷらも応援したいけど、チャーシューも好き！」といった迷いながら話す姿も微笑ましく、子どもたちが物語の中で自分なりの感情や考えを持ち始めていることを実感できた。今回の対話の工夫を通じて学んだのは、子どもたちが主体的に物語の世界に関わるような「問いかけ」や「リアクションを引き出す仕掛

け」を意識することの重要性だ。単に楽しいだけでなく、「一緒に劇を作っている」という気持ちを引き出す対話を今後も意識していきたい。

（執筆者：時枝悠斗・内田千楓）

（3）演出の工夫

道具や表現方法、場面の構成の演出について工夫した点は、道具の選定(段ボールやフェルト、折り紙等)とビジュアル(うどん、ラーメン、そばの衣装)の工夫だ。

衣装を作る際にはラーメンの器やうどんのどんぶりを意識した模様を取り入れたり、割り箸を実際に衣装に付け加えたりした。 そうすることで子どもたちがより物語に入り込みやすいように工夫した。また、ラーメン役が「うわー！」とやられて大げさに叫びながら倒れる場面や、うどん役が「まだまだだ！」と切羽詰まった声でセリフを言いながら戦う場面を入れることで視覚だけではなく、聴覚からも楽しめるようにした。

衣装の工夫では、ラーメンとうどんの麺の違いを毛糸や布フェルトの二つで表し、麺の違いにこだわった。また色にもこだわり、ラーメン役の衣装は赤や黄色を基調に、うどん役の衣装は白やクリーム色を中心に、どちらがどちらか一目で分かるようにすることで遠くから見ても視覚的な区別が出来るように表現した。

【左側：表　　右側：裏】

さらにそば役の衣装では、お皿は黒で表し、グレーの毛糸でそばの麺を表現した。他にもネギと海苔を加えることでよりリアリティをだし、見ただけで蕎麦だと分かるように工夫した。

うどん体操では戦う前の動きとして体全体を動かせるような動きを考え、子どもたちも一緒に行えるように声掛けを行った。うどん体操の動きとしてはうどんの材料を混ぜる動きから始まり、こねる動き、うどんを踏む動き、切る動き、最後にうどんの麺を茹でる動きといったようにうどんの調理方法を元に考えた。身体を使い表現したことで、子どもたちも進んで体操に取り組み、興味を惹かれていたように思う。

劇中の演出では、衣装を使ってうどんとラーメンの区別がつくようにしたり、喋り方をうどんとラーメンで変えていき

子ども達が楽しみながら2人を対比出来るように工夫した。また下の写真にある、ラーメンモンスターやうどんやのお姉さんで影を使いながら戦った。その時うどんとラーメンが舞台下に降り、ラーメンモンスター頑張れー！うどんやのお姉さん頑張れー！と声を掛けるようにした。すると子ども達も自分の好きな方を応援することが出来るようになっていた。興味を引く事が出来た。

対決後の結論をユーモラスにどちらが勝つのかを決める際に、「どちらも美味しい！」「うどんもラーメンもそばもそれぞれ美味しくていいじゃないか！」というように、最後に和解や共感を描くことで、競争だけでなく友情や多様性の重要性を学んでもらえたと思う。実際にそば役がラーメンとうどんの和解をして最後にスパゲティをみんなで食べて仲良くなるシーンに展開にすると、ポジティブに伝えることができたと思う。また、やられる時や攻撃する際に、ゆっくり動かして時の流れを遅くする事でより効果的にやられた表現を行った。衣装作りでは、体のサイズだけだなく、動いても見えやすいお腹の下辺りから首元はネギで3役それぞれ統一して表現した。

（執筆者：橋本和花）

（5）言葉とセリフ

私が言葉の表現の仕方で考慮した点は、大きく3つに分けて「伝わりやすい」「乱暴な表現を控える」「面白い」の3点にこだわった。まず1つ目の伝わりやすさでは最初の登場から目の前にいる子どもたちに向けて挨拶をし、「僕の名前はうどん、僕は毎日大好きなうどんを作ってるんだ！」と自己紹介を始め、大好きなうどんを作るためのうどん体操に繋がるよう考えた。ラーメンからの攻撃を受ける際にも攻撃を受ける直前に「なんだこれは！？」というセリフを入れることによって、ラーメンからの攻撃がきていることが子どもたちに伝わるように且つセリフが被らないようにセリフを入れた。うどん側からの攻撃でも「それならこっちは大技を出してやる！」とパンチ、キックよりも強い技を出すと子どもたちに伝わる表現を意識した。

2つ目の乱暴な表現を控える意識ではラーメンからの手紙を読んだ際の「なんだと！」と怒るシーンで「くっそー！」などの表現を控え、言葉を変換しつつ“怒り”が伝わる表現にして、チャーシューの攻撃を受けた時にも「なんだこれは、重たいぞー！！」と重いものを乗せられていると伝えながら攻撃を受けることを意識した。最後のうどん、ラーメン、そばが仲良くご飯を食べに行って戻って来る場面でも「あー、ナポリタン美味しかったね」と「うまかった」という言い方にせず美味しかったと表現した。そして最後の面白さでは、攻撃を受けた際に大きく「うわぁーーーー！」と短くセリフを切るように発するのではなく、長く語尾を伸ばして発することでかなり大きな攻撃を受けて負傷したと聞き手が理解できるように意識をして言葉を発した。

うどんもラーメンも攻撃する時には「これでもくらえ」や「それならこっちも大技だ！」と必死に言葉を発したり、攻撃を受けた時には痛い、重い、悔しいなど誰にでもストレートに伝わる言葉を選び聞き手が面白いと受け取ってくれるよう考慮した。攻撃の道具を運ぶ裏方の人たちに

も具材を持って来る際に「ヒュー」と言葉を発してもらいながら持って来てもらうことで戦いの中に面白さを含んだ劇場に仕上げた。

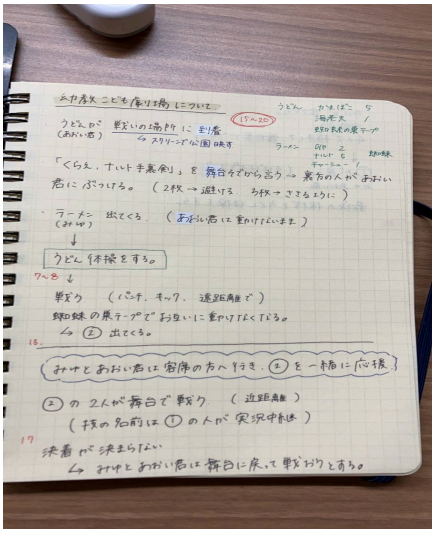
（執筆者：宮脇蒼）

（6）動きと身体表現

動きと身体表現では、うどんとラーメンが行ったパンチやキック等の攻撃や受け身、うどん体操で行った子ども自身のオリジナルな動きを取り入れられるように工夫して行った。

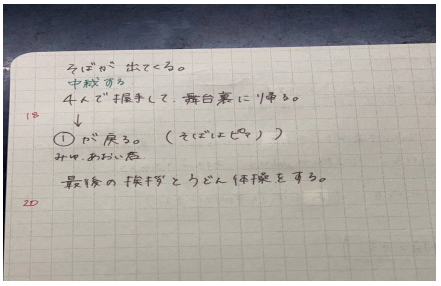
1つ目のパンチやキックでは、台詞に合わせ相手のどこに当てるのかを意識し、その場所に当たるようにスローモーションで体を大きく動かした。そうすることで劇を見ている子ども達にも分かりやすく、動きが伝わるのではないかと思った。この時、攻撃を受けとる方もパンチをされた場所から体を大きく動かし、実際に攻撃を受けたように倒れたり後ろに仰け反ったりなどの受け身を取るようにした。倒れる中でも特に意識したのは、劇を見ている客席からうどんやラーメンが倒れ込む姿が見えるようにしたことだ。倒れ込む姿が見えることで劇が今どのような状態なのか、どこに攻撃が当たり倒れたのかなど子ども達に分かりやすく、飽きることなく見ることが出来るのではないかと考えた。

次にうどんやのお姉さんとラーメンモンスターとの戦いでは、うどんとラーメンよりも体が大きいということを表したかった為、プロジェクターの影絵を使いうどんやのお姉さんとラーメンモンスターの体の大きさを表した。また影絵を使い、うどんやのお姉さんが不利になっているのを表現するようにうどんやのお姉さんがラーメンモンスターよりも小さくなるように位置を設定し、表現した。うどんやのお姉さんが登場した際に剣を2本持ってくることにより、ラーメンモンスターをやっつけてみせる！という強い気持ちと武器を持つことにより相手が自分よりも強いということを表した。更に腕や足を大きく動かすことで言葉だけではなく視覚的にも伝わるように表現した。そして何度も攻撃をするが、ラーメンモンスターに全く攻撃が効いていないのを表しながら、剣が飛んでいってしまう部分を入れ、数回物理攻撃を入れた後とどめの一撃を表した攻撃で最後にうどんやのお姉さんがラーメンモンスターへ襲いかかる動きを入れた。



うどん体操では、うどんを作る工程を体全身で表す身体表現を取り入れた。そのなかでも、全部動きを指定するのではなく、自由に動くことを取り入れることで、子どもたちが自分自身で考えたオリジナルな身体表現が生まれてくると考えた。

また、見本では大きくした動きに見えるよう、足踏みを斜めにしたり、手を大きく伸ばし丸を作りしゃがむ、大ジャンプを取り入れるなどの工夫をした。



劇全体を通して、大きな舞台でうどんとラーメンの2人がメインで舞台に立っていた為、客席から見て小さな感じに見えないよう、距離を十分に取ったり、影やスクリーンを使って大きく見せるようにした。また道具を使った攻撃も、ゆっくりと武器を持ってくることで、本当に武器が動いているように見せる工夫もすることができたと思う。何度もピアノの音に合わせて動きを作って

いき、担当の先生にもどのような動きを組み合わせていくとうどんを作る際の工程を再現できるのかを考え、一つの音につき動きを一つのみ付けるのではなく、二つや三つずつ入れて参加してくれている子どもたちが飽きないような動きにした。

（執筆者：明心優）

（7）音と音楽

私たちは音や音楽を使用することで、効果的な表現やメッセージの伝達を目指した。以下に、具体的な使用方法や工夫した点は四点ある。

まず、一つ目は演劇において、音楽（背景音楽）の選定には注意を払い、音楽は見ている子どもたち含む来場者の注意を引きつけるために重要な要素であり、適切な音楽を選ぶことで演劇の雰囲気やテーマを強調することができる。例えば、明るいトーンの音楽を使用することで、ポジティブなイメージを与え、来場者の興味を引くことができた。また、緊張がある状況を表現する際には、緊迫感のある音楽を選ぶことで、緊張感を高めることができた。

二つ目は、音楽のテンポやリズムを調整することで、演劇や動画の進行に合わせたリズム感を演出した。例えば、説明や紹介の部分ではゆったりとしたテンポのピアノ（子犬のマーチ）を使用し、来場者に情報をゆっくりと受け取ってもらうようにした。それに加え、ラーメンからの手紙を受け取ったうどんが2回目のピアノ（低音の子犬のマーチ）で怒ったように足音を大きくし表現した。さらにアクションや展開の部分では、テンポの速い大太鼓を使用することで、緊張感や興奮を高める効果を得ることができた。

三つ目は裏方の声による効果音や大太鼓の使用も、来場者の注意を引くための重要な要素として活用した。例えば、ポイントを強調する際には効果音を鳴らすことで、その部分に来場者の注意を集中させることができた。また、映像の切り替えや遷移の際にも効果音を使用し、スムーズな遷移感を演出した。効果音は、主役の2人だけでは伝えきれない情報や感情を補完する役割も果たした。

そして四つ目はさらに、音や音楽を使用することで、公園などの情景や背景を表現する効果も得ることができた。うどん（役）が「やっと着いた、ここが大谷公園か」とセリフをつけることで来場者に特定の場所や雰囲気をイメージさせることができた。
戦いの途中で、うどんとラーメンが客席に向かい、子どもたちへ応援することを呼びかけに行くことで、来場者の参加感や興味を引くことができた。

以上のように、音や音楽を使用することで、効果的な表現やメッセージの伝達を図りました。適切な音楽や効果音の選定、音楽のテンポやリズムの調整、情景や背景の表現、緊迫感の取り入れなど、様々な工夫を行いました。これにより、来場者の興味や関心を引きつけることができ、効果的なコミュニケーションをはかることができた。

（執筆者：井形勇人）

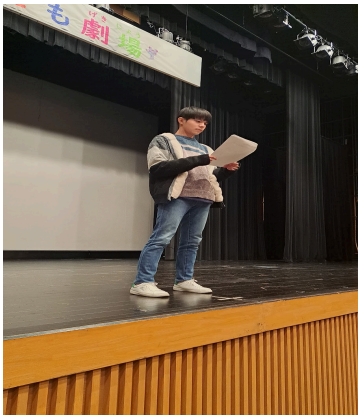
（8） プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

私たちは子どもたちの劇中での様子を裏方から見ていたが、うどんとラーメンという身近にある言葉、食べたり見たり、好きである物であった子どもも多かったのか凄く反応が良かったと思った。うどんとラーメンの戦いでは、うどんとラーメンの攻撃には入っている具材を使って攻撃を行うことで、子どもたちが『あ、〇〇だ！』と反応し、知っているものが

出てきたからか、とても夢中になっているように感じた。また、うどんとラーメンの戦いの際に『うどん頑張れ！』『ラーメン負けるな！』など子どもたちが戦う2人を応援する姿も見ることが出来た。それは、子どもたちに対して、『応援してね』と声をかけたり、うどん体操を戦いの前に行った事で、より子どもたちが参加しやすい雰囲気を作ることができていたからだと思った。

また、うどん体操では子どもたちが写真のように席を立ち前に立った生徒と共に体操を元気よくする姿が見られた。うどん体操は子どもたちも覚えやすい簡単な動きかつ、リズムも良く体を動かすのが苦手な子どもでも楽しく気軽に参加できるようなものであったことがとても良かったと思った。プロジェクターの影を使った演出ではうどんやのお姉さんとラーメンモンスターの2人の戦う姿が影に映され、負けた側がどんどん小さくなっていき、最終的にラーメンモンスターはうどんやのお姉さんの攻撃を受けていなくなる場面で子どもたちの反応がとても良かったと感じた。袖幕から召喚されたり呼ばれたりして登場し、そのまま負けた側が消えていってしまうと、あまり子どもたちに伝わらなかったと思う。しかし、影を使って負けた側を小さく見せ勝った側を大きく見せることで、子どもたちもどちらが負けたのか分かりやすく、影の仕組みに対する興味も持っていたように感じた。2人の戦う場面で銀色のテープを攻撃として使ったところでも子どもたちの『すごーい！！』という声が聞こえた。ただただ戦うだけでなく、目に見えてわかる、そして子どもたちが好むような色のテープを使ったことがとても良かったと思った。

また、そばが出てくる場面でも『そば好き！！』等子どもたちが口にしたことあるような食べ物を使っていたことが初めに劇への興味を引くことができた要因だと改めて感じた。子どもたちが興味を持ち、積極的に参加できる劇に出来たのは、一つ一つの動きを大きく出来ていたこと、また、子どもたちが参加しやすいようなリズムの良い簡単な動きを取り入れたこと、子どもたちへの声掛けを行っていたこと、出てくる食べ物が子どもたちが普段から口にしたことのあるものであること、戦いの際の手作りで作っていた道具も子どもたちが口にしたことがあるようなものであることだと思った。また、影を使った演出など子どもたちが目で見て目で感じ、一緒に参加し興味を持てる工夫を行ったことであると思う。



（執筆者：矢野奏海）

（9）取り組む過程での改善と工夫

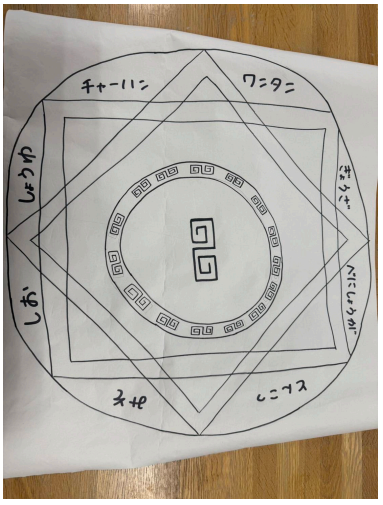
うどん対ラーメンの劇を行うなかで、考え始めた当初は裏方役の人達が裏から"なると手裏剣"や"かまぼこ手裏剣"などの武器をうどんやラーメンに投げ、うどんがその攻撃を受ける流れだったが、担当の先生からのアドバイスを受け、裏方役の人達も舞台に立ちゆっくりと武器を持っていき、うどんとラーメンに当てるという流れに変わった。さらに武器を持っていく際も効果音などは言わない状態のまま練習をしていたが、数回練習を行った後に武器を持っていく際に効果音があった方がいいという話し合いを行った結果意見が出たため、武器を持ってくる裏方の人がその武器にあった効果音を口で発するという方向になった。

またプレ幼教こども劇場では焼きいもグーチーパーを替え歌にし、動きも座った状態で動けるように手の動きや足踏みなどの分かりやすい動きを取り入れていたが、戦う前の体操ということで全体的に大きく体を動かす動きを取り入れた方がいいという話が出た。その為、

体全部を使えるように椅子に座った状態ではなく、立った状態でうどん体操をすることにした。更に本番では初めから終わりまでを教員に作曲してもらったオリジナル曲で行い、動きも体全体を動かせるように手のひらを上にあげ体を伸ばす動きを取り入れたり、子ども達が自由に身体表現を楽しめるように自分の好きなように体を動かすことが出来る『茹でる』という動きを加えた。

ラーメンモンスターとうどんやのお姉さんが戦う場面では、初めはホリゾン幕を下ろしそこに照明を当てた状態のままホリゾン幕の後ろでラーメンモンスターとうどんやのお姉さんが戦う予定だったが、舞台上の作りやその他のことで不安な点が出た為、担当の先生とグループのメンバーと共に話し合いホリゾン幕を無くすことにした。そしてホリゾン幕を無くすことによってラーメンモンスターとうどん屋のお姉さんが舞台上に現れ、子ども達から見える状態で戦う流れへと変更した。その際ホリゾン幕にラーメンモンスターとうどん屋のお姉さんの影が映ることにより、舞台上で2人が戦っている様子が見られるのと同時にホリーにはそれぞれの影の大きさや手の動きが映るように工夫した。

ラーメンモンスターとうどんやのお姉さんが戦うなかで、舞台上のどの位置に立てば体が大きく見えるのか、反対に小さく見えるのかを練習の中で何度も繰り返し、ベストな状態を探した。また切りつけたり、キックをする動きもゆっくりとすることで観客にどのように映るのか、今どのような状態なのかがはっきりと分かるように工夫を行った。それに加えてリハーサルと本番では各グループに与えられた持ち時間の都合上、アドリブを何度も加えながらの演劇となったが、アドリブも途中で止まるなど一切起きずそのまま自然な流れで劇を進めることができた。



（執筆者：中村楓果）

（10）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察について、幼教こども劇場の様子を私は音響だったので裏から見ていて、子どもたちは戦うシーンが好きで盛り上がっているなという印象があったように思う。子どもたちがアクションなどそのような場面が好きなのはテレビなどの影響なのかなと感じた。アクションを取り入れたグループは少なかったように感じて、なぜ子どもたちがアクションが好きなのだろうと考えてみると、子どもたちがアクションを好きな理由は、いくつかの要素があると思います。

まず、アクションは刺激的でエネルギッシュな場面が多く、子どもたちはそのスリルや興奮を楽しんだり、また、アクションの多くは視覚的に魅力的で、速い動きや大きな音、派手な効果が視覚的・聴覚的に子どもの興味を引くからじゃないかなと思った。
さらに、アクション映画やアニメにはしばしばヒーローが登場し、困難を乗り越えて勝利を収める姿が描かれることが多く、子どもたちはこうしたヒーローに憧れ、自己肯定感や勇気を感じることができるからだと私は感じた。また、アクションが展開するストーリーはテンポが速く、子どもたちの短い集中力に合っているため、退屈することなく楽しめるのも理由なのかなと感じた。私自身も劇などはアクションがある方が興味を引かれるし頑張れ！など

子どもたちも一体となって応援できていたので良かったと思った。アクションをいれるのは子どもたちにとっていい影響なのか考えた部分もあったけど、結果的に成功だと思う。
最初うどんが出てきた時に明るい感じで出てきていて、そのおかげで子どもたちも何が始まるの！？と興味を示していたように感じた。また、うどん体操をした時に立って行うことで子どもたちは体を動かすことも好きだと思うので楽しそうにしていて良かったと思う。私自身は裏方なので子どもたちの様子をよく観察することができて反省点や良かった点を見つけることができて良かった。

（執筆者：上村星紫）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【宮脇蒼】

私がこども劇場で学んだことや、感じたこと、工夫点や反省点がある中でまず初めに感じたことは、子どもたちの反応が実際にどのくらい大きいのか小さいのかを分からない状態で進めていくことに難しさを感じた。準備期間が約2ヶ月という短さで授業として入っているコマ数も週2回と少なくその中で大谷幼稚園でのプレまでの1ヶ月間はどのように動いていいのかが分からずとても動き出すのに最初の絵本を決める段階から迷いがあった。しかし、絵本が決まってからどのように演出していけば子どもたちが「うどん対ラーメン」の絵本(劇)の世界に入って来られるのか正解が分からないことが長く続いたが、グループのメンバーと「うどんだったら○○みたいな衣装がいいんじゃない」や「この攻撃する時の具材大きく作りたいよね」と意見を出し合いながら尚且つ常に子どもたちが観ていてどう思うかという視点を動きやセリフを一つ一つ足すごとに準備していくことで常に面白い、参加したい気持ちを子どもたちに味わえてもらえたと思う。準備期間の中で特に大変だなと感じたことはうどん体操をオリジナルの音と動きで完成させるまで最初から最後までのギリギリの期間で作り上げたことが大変だなと感じたが、うどんを作る時の動きを分かりやすく、真似しやすくして子どもたちが劇場の最初の段階から参加しやすい構成を考えることでその後の展開に惹き込めることが出来たと思う。アクション系の絵本だったということもあり、とにかく戦いの場面での動きを大きく見せるためにリアクション一つ一つを倒れる時のセリフや音で表現した。
衣装でもうどんとラーメン、そばであることが伝わりやすいように表は具材、裏面はうどんなどの麺を表現したものを作り衣装が子どもたちに直接伝えるために劇中は倒れる時は表を向きながら倒れたり、裏面を見せる際にも動きをゆっくりと動くことを意識してうどんや、ラーメンのセリフだけでなく衣装からも絵本の世界に入りやすいよう考慮した。

製作物では本物に近くなるよう卵は煮卵に見えるように3色フェルトを使い、チャーシューやえび天なども質感にこだわり肉のほぐれた感じやえび天の衣のカリカリ感など細かい部分にこだわり、講堂の後ろからも見えるサイズに作り何が登場して攻撃に使われているのかを子どもでも一目で伝わるように製作した。見た目だけでなく、攻撃の名前に具材の名前を入れて手裏剣やロケットなど子どもたちが楽しめるように攻撃の名前も伝わりやすく面白いものにした。

今回の劇場で学んだことは将来的に私たちが子どもや保護者の前に立つ機会が増えていくであろうという点に着目し、動きを大きく、セリフの声を大きく、見えやすく伝わりやすく参加しやすいを考慮し劇に向けて頑張っていたが、絵本の内容を

表現するのがこんなにも難しいものだとは思いもしなかった。製作物一つにしてももっと再現度を高めるのであれば別の材料をこういう風に使った方がいいよねという話も出ることもあったり、この言葉って子どもたちに伝わるのかなと悩むことの連続で練習期間は子どもたちがいない状況で子どもがいる状況を想像しながらの練習であったため、あくまで自分たちの想像でしか進められないことに難しさを感じたが、最初から子どもたちの反応に重きを置いた話し合いが出来ていたため、本物の反応も良く、終わったあとには○○をもっと○○出来たら良かったねと反省点も見つかり学びも含めとてもいい結果を出せたと思う。プレと本番では全く違う子どもたちの反応であったり、私たち自身の演技力の向上や使用した道具、衣装などを大きくレベルを上げたものにしてリハーサルと本番に臨んだ。

リハーサルの方ではハンドマイクを使用しうどん体操を子どもたちと踊る予定だったが、地声でも後ろの客席まで声が届くのかを確認を行い、出来る限り地声の方がいいのではないかという意見が出ていた為、地声でうどん体操を踊るなど本番ギリギリまで試行錯誤しながらより良い劇場にしようと行動した。このような動きは実際に保育者になった時に保護者に対して子どもたちの成長をより強く感じてもらうために必要な動きではないかと思うのでこども劇場までグループのみんなで頑張ってきてとても良かったと思えた活動だった。

【中村楓果】

今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは表現力である。初めの準備期間では裏方の人を舞台上に出さず裏から武器が出てきたり、攻撃を当てた方がいいと皆で考えていた。しかしプレ幼教こども劇場でその通りにすると武器がうどん役に当たらなかったり、うどん役に届いていなければいけない手紙が届いていないということが起こった。そのような様子に子ども達も武器が相手に届いていないことが面白いという、私たちが子どもの様子として考えていたうどんとラーメンが戦っている様子を楽しんでもらうという目標と離れていた為、プレ終了後、先生方やグループの皆で話し合い、裏方の人を舞台上に出し確実に相手に当たるようにしたり、手紙をうどんに渡す配達員というキャラを増やす方法をとった。

その結果、本番では戦っているうどんとラーメンの様子に子ども達は集中しているように感じられた。他にも舞台に立っているうどんが応援してくれと声を掛けなくとも自分たちからうどん頑張れー！ラーメン頑張れー！という声を出しており、こちらが子ども達へ呼びかけずとも劇を見ていく中で自然と応援したくなるような気持ちが子ども達の中に生まれるのだと学ぶことが出来た。

【明心優】

私が、実際にこども劇場を通して感じたことは、子どもたちがどのように反応してくれるのかや、どうしたらより楽しんでくれることを想像しながら練習を進めていくことがとても難しいと感じた。

自分たちができていると感じていても、客席から見たら小さく見えていたり、楽器と実際に合わせて動くことが思っていたよりも難しく、苦戦した。しかし、チームのメンバーで表に出ている人、裏方の人全員で練習後にもっとこうした方がいいんじゃないなど意見を出し合って発表をよりいい物にできるよう工夫していくことができ、子どもたちに楽しんでもらえるようなうどん対ラーメンになったのではないかと感じた。

また、本番は子どもたちも少人数しかいなかったので、一人ひとりがどのような反応をしているのか舞台から確認することができ、一緒にうどん体操をしたりなどして、コミュニケーションがとれていることを実感した。
最後の片付けの時に1人の子どもから「面白かった」と声をかけられ、そう思ってもらえるように2ヶ月程前から準備をしていて、最終的にいい物ができてよかったなと感じた。
全員で1つのことを準備することは、これからも出てくると思うので今後の活動時にも今回学んだことを積極的に取り入れていきたいと思う。

【津山桜】
今回のこども劇場で印象に残ったことは、練習から本番にかけて成功させたいという思いが強くなっていき、一人ひとりが意見を言い合う雰囲気をつくることが出来たことである。また、製作班や脚本や音響班、予定を立てるなど、始めから役割を決めておいたことでスムーズに練習を行うことに繋がり、本番前に何度も練習することが出来た。準備物が揃っていたため、毎回の練習でテーマに合った作品をつくることに繋がったのではないかと感じた。
しかし、いざ舞台に立ちリハーサルを行うと、表に出て演技をすることに抵抗がある人が多くいた。その際であっても、私たちのグループはグループでの意見を言い合うことが出来たため、自分自身が納得して演技を行う状況をつくっていくことが出来た。最終的には、一人ひとりが自分の役割に真剣に取り組み、観客に楽しんでもらえるような作品になったのではないかと思う。こども劇場では、観客が少なく盛り上がるのかなどの不安があったが、グループの全員が自信を持って参加できたことで、観客が盛り上がっている様子を見ることが出来た。そして、意見を受け入れたり、聞いたりし合う雰囲気づくりの大切さを学んだ。

【橋本和花】
幼教こども劇場を通して1からみんなで協力して話し合い、劇場に合わせてかまぼこやえび天を作るため、調節することが難しいと感じた。また、衣装作りでは、劇場で暗くても見えやすい色や、大きさ、その役のサイズに合わせて作ったため、お皿の色や麺の大きさ、動いて壊れない物を意識して作った。本番では、最終的にうどん役の衣装がやられる時にネギの所が壊れていたが、それはよりやられている感じに見えたため、壊れていても危険さはなかったのもあるため、リアルにやられた再現度が出来ていたと思う。子ども達は、うどんが好き！ラーメンが好き！と伝えてくれ、うどん役が「応援してくれるかな」と子ども達に声掛けをしたら、「頑張れー！」と大きな声で声を張って伝えてくれている子ども達の声が、裏にも聞こえて嬉しかった。
反省点としては、劇中の攻撃が緊張で少し早かったため、ゆっくり落ち着いて深呼吸する必要があると思った。自分が思っている以上に観客席から笑い声や応援している声が聞こえてきて感情移入しているのか、キャラクターの動きや表情にもこだわってよかったと思えたし、みんなが楽しんでくれたのが嬉しかった。対決する意味では、ラーメンとうどんの対決を通じて、"どちらが良いか"ではなく、"どちらも素晴らしい"というメッセージを伝えることができたと思った。食べ物にもそれぞれの特徴があり、その時その時の自分の気分などによって選ぶものが変わるというのは、生活の中でも大切なことだと思ったし、伝えることが出来たと思う。

【今村美奈】
　約2ヶ月間の準備を行い、幼教こども劇場を通して創造力とコミュニケーション能力、計画性などたくさん学ぶことができた。そして実際にある絵本から何を表現したいのかを選び一つの作品を作り上げていくのはとても難しかった。自分達が子ども側だったらどんな演出が楽しいのか、絵本の世界にどのように工夫していけば入り込んでくれるかなと考えみんなで取り組んだ。私は裏方として製作物を担当し、ラーメンとうどんが戦う道具や武器をどの材料で作るのかなどみんなで話し合いながら取り組んだ。プレ幼教劇場ではラーメンとうどんの衣装がなく子ども達の前に登場すると子ども達から「うどんじゃないよ」「ラーメンじゃないよ」などの声があがった。どのようにしたらうどん、ラーメンと分かってもらえるのか話し合い、アイデアを出して衣装を完成させることが出来た。劇当日では、表に出る人のサポートをし、子どもたちが楽しんでる様子がみられみんなで頑張ってきて良かったなと思うことが出来た。この活動を通して毎時間の授業の中での話し合いから同じグループのみんなから自分が想像していなかった部分や面白い発想、色んなアイデアがあり、違う発想を学ぶことができた。色んな視点に目を向けて、色んな人とコミュニケーションを取っていきたいと思うことが出来た。

【上村星紫】
　今回の幼教こども劇場を通して、私が学んだことはどれだけ準備をちゃんとして子どもたちの反応を予想して練習を行っていても本番の子どもたちの反応や行動は私たちにとって思いがけないことが起きたりするのでその状況が起きた時に臨機応変にすぐに対応することが大切だと感じた。私は表に立つことはなかったけど、もし自分が表に立って子どもたちの反応を見ながら臨機応変に対応することは難しいと思った。準備の段階でみんなで小道具を作ったりセリフから自分たちで考えたり本当に全部自分たちで劇を作っていけるのか心配しかなかったがみんなが協力していく中で団結力も生まれてもっと工夫したい点などをお互いに伝え合えるようになり実際に行動に移していけた。そのおかげで日々、より良い方向に進んでいったと思う。また、表に立って劇を行う人は本当にすごいなと思った。私は人前に立つことが苦手なので今回も表に立つ勇気が出ず、裏方として意見を出したりしていた。裏で表に立って堂々と劇をする人たちを見て自分も大人数の前で堂々と発表できるように成長できたらいいなと心の底から思えた。私にとってそれは本当に難しいことだけどこれから先、保育者として大切なことだと思うので今回学べてよかった。また、みんなで一つのことを作り上げるという楽しさも学ぶことができたし、本当に多くのことを学べた活動だった。
　子どもたちが楽しそうに体操をしていたり笑い声がたくさん聞こえたり、頑張れー！という劇の中に入り込んでいる姿を見て本当に嬉しく感じた。一緒に最後まで作り上げてくれた仲間に感謝したいと思う。

【田中莉央】
　今回幼教こども劇場を通して、みんなで協力してひとつのものを作り上げる大切さを学ぶことが出来た。1人では絶対出来ないものであり、みんなでこうしたらいい、ああしたらいいのではないかなどと意見を出し合って取り入れながらとても良い劇を作り上げることができた。私は、うどんやのお姉さん役として影絵を上手く使いながら登場した。影絵を使うのはとても難しく、どうやったら大きくなるのか

小さくなるのかが上手く理解できなかったけど少ない時間で練習して頑張ることができた。周りの人から凄かったよなどと言って貰えてとても頑張った甲斐があった。みんなでひとつのものを作り上げる上で意見がすれ違って揉めることもあったからこそ、相手の意見を認め合いながら尊重する大切さを改めて実感できた。また、道具などを作る際はみんなで協力しながら役割分担をして作ることが出来た。普段はなかなか話さない人とも沢山話して何かを一緒にするということは最後だど思うからこのメンバーで劇を作りあげることができて良かったと思う。

チームリーダーとサブリーダーには特に沢山のことをしてもらって良いものを作り上げることができたのだと思う。本番では子どもたちも楽しそうに劇を見てくれて参加してくれてやって良かったとあらためて思えた。この学びを就職してからも繋げていきたい。

【徳永琉亜】

私が劇を通して学んだことは、仲間と協力する大切さや個性の尊重です。劇のグループを決め、絵本選びから始まった。絵本選びから一人一人自分の意見を言い合い、どの絵本を選びどのような物語を進めるかを話し合った。私たちだけでなく子どもたちと一緒になって楽しめる劇を考えることは簡単ではなく、大変だと思うこともあったがグループのリーダーが率先して考えてくれ、とてもいい劇となった。劇の準備では、衣装作りを行なった。うどんとラーメンをテーマにした劇なので、食べ物の特徴を表現するために工夫をした。プレ発表では、うどん役がうどんにみえないと言う子どもの声があったので、それを元に衣装作りにこだわった。うどん役の衣装には白い布やうどん麺は毛糸を使って麺を再現した。ラーメン役には黄色い布やスープを連想させるようにお皿を垢色のフェルトなどを作った。また、うどんとラーメン役には、ねぎをネックレスみたいにしたり、卵やかまぼこ、きつね、チャーシューなどたくさんの具材を作り、衣装からも楽しさなどを出せるように表現し、衣装作りに取り組んだ。

【時枝悠斗】

今回幼教こども劇場で、最大の学びは「準備の徹底が子どもの反応を大きく左右する」ということだ。私たちのグループは「ラーメン対うどん」という絵本をもとに劇を作り、私は裏方として黒い服を着て、ナルト手裏剣や煮卵爆弾を使う重要な役を担当した。本番前から、チーム全員で小道具作りに全力を注ぎ、ナルトやチャーシュー、天ぷら、煮卵、お箸など細かい製作物を一つひとつ丁寧に仕上げた。そのおかげで、劇全体にリアリティが加わり、子どもたちが物語の世界に引き込まれたと感じた。本番中、子どもたちはナルト手裏剣や煮卵爆弾が飛び交うシーンで大興奮して笑顔を見せ、声を上げて反応してくれた。特に、「ラーメンがんばれ！」「うどん負けるな！」という声が劇場内に響いたときは、自分たちの準備が子どもたちの想像力や感情を引き出すことにつながったと実感できて、本当に嬉しかった。

この経験から学んだのは、子どもたちを楽しませるためには「徹底した準備」と「物語に引き込む工夫」が必要だということだ。ただ舞台を見せるだけでなく、五感を通じて物語を体感できる要素を盛り込むことで、子どもたちの心をもっと動かせることがわかった。この学びを次の活動にも活かし、さらに楽しく有意義な体験を子どもたちに提供していきたいと思う。

【内田千楓】
　今回の幼教こども劇場は、子どもたちが楽しみながら参加出来るものだったと思う。実際にやってみて感じたのは、子どもたちの純粋な反応や笑いや驚き、興味深そうに身を乗り出して観ている姿から、とても楽しく参加して観ていたと思う。
こっちの問いかけにも元気に答えてくれたのでしやすかったと思った。
一方で、予想外の反応も少しあり、特に、物語の展開に対する子どもたちの声や行動は、私たちが想像していた反応とは違うもので、子どもたちの視点や感性の豊かさに驚いた。また、劇中のセリフや動きが少し難しかった部分では、子どもが驚いている様子が見られた。
　振り返ると、幼教こども劇場を通して子どもたちが笑顔になったり考えたりする姿を見ることができ、子どもがどんな考えを持っているのかを知ることが出来てとても楽しかった。今後の課題としては、子どもたちとの対話や意見交換の時間を増やし、子どもたちの反応を想像してより楽しく参加、観覧できるものに出来るといいなと思う。また、ストーリーのテンポやキャラクターの動きをより工夫し、年齢や背景の異なる全ての子どもたちにも楽しんでもらえるように工夫すると良かったと思う。

【矢野奏海】
　私は今回裏方として劇に参加したが、表にたつみんなを見ていると、席に座る子どもたちがどうすれば参加しやすくなるのか参加したいと思えるのかを試行錯誤しながら考えることができていたと思う。また、裏方の人も一緒に色んなことを考えることができた。裏方だからこそ分かること、見え方などを教えあい訂正をしていくことが出来た。その結果本番では思っていた以上に子どもたちの反応がとても良くて、楽しく参加してくれている姿を見ることが出来、とても嬉しかった。
また、子どもたちは自分の身近にあるものや、知っているもの、使ったことがあるものなど、よく知っているものなどを使ったり、目で言葉で見えるようにするとより劇に対しての興味を引くことができ、『〇〇だ！』と知っていること見たことがあること、ものに対してとても意欲的で興味を持ってくれるのだと改めて感じた。
表にたってしてくれた人たちは色んな緊張があったと思うが、練習通りの声の大きさと、表情、沢山打ち合わせをしてきたことを全て出すことが出来ていた。表に立ってくれた人達がとても頑張って居てくれたからこそ私たち裏方も頑張らないといけない、サポートしないといけないと思うことが出来たのだと感じた。

【井形勇人】
　私がこの幼教こども劇場を通して学んだことはたくさんある。その中でも特に心に残ったのは、私の役割である郵便配達員です。なぜならみんなが一丸となり僕を見てくれていたからである。短い時間ではあったが、その一瞬だけでも主人公になれた感覚があり、とても気持ちよかったからだ。他には僕たちのグループの仲間が練習や、シュミレーションを通して、よりいい舞台にしようとしていたのが凄くわかり、主演の2人がとても心強く、少しでも子どもたちを含む来場者を楽しませようとしていたのが本番だけではなく準備、練習の段階から気づけてとても感謝してる。また舞台に立っている人だけではなく、裏方の人も舞台に出ている人にはなかなか分からない苦労がありお互いの立場にならないと分からない部分がいくつもあったと思う。しかしお互いの立場にならなければ分からない部分がいくつもあっ

たと思うがお互いが気遣い合いどのようにすればより良くなるのかを意見を出し合って本番に向けて準備を進めていっている印象だった。準備期間の序盤に意見の違いから揉めることも多少ありましたがそれもまたいいスパイスになり演技や幼教こども劇場により一層熱がはいったと思う。さらに先生方にはとても感謝している。幼稚園、保育園の手配、また、会場準備など様々な学生には見えない工夫をして下さってとても心強く自分たちの劇に集中することができた。